

# Alternative Systems Study Bulletin

メール版 第23巻第3号 (2015年9月8日)

三回目のメール版を送ります。

ルネサンス研究所などの複数のメーリングリストに投稿しますので、これまで手に取つておられなかった方々にも届くことになります。配信停止の手続きは、メールで連絡して下さればいいのですが、メーリングリストのばあいは配信停止ができません。お手数ですが届いたら削除して下さい。

この小冊子は、1993年から発行しています。最初は知的創造集団のネットワーク形成をめざし、数人の同人で始めました。しかし、私が阪神大震災以降多忙になったこともあります。第4巻(1996年)からは私の個人誌として再出発しています。そのころは協同組合のシンクタンクづくりをめざしていました。シンクタンクづくりは実現していませんが、以降隔月刊で発行し、主要な論文はHPに掲載しています。最近HPの更新もしていませんが、これを機会に努力してみます。

メール版は拡散自由です。またいろいろな意見や異論があれば、メールでお知らせください。

編集 境 毅(筆名:榎原 均)

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169号 貿易研究会

ホームページ <http://www.office-ebara.org/>

メール [sakatake2000@yahoo.co.jp](mailto:sakatake2000@yahoo.co.jp)

購読料 無料(カンパ歓迎)

カンパ振込先(郵便振替)

口座番号:01090-5-67283

口座名:資本論研究会

## 23巻第3号 目次

### まえがき

#### ○「現場から」

- A) ソーシャルセンター研究会中間報告
- B) 8月22日 第2回中津プロジェクトイベントのご案内
- C) ドロップアウトコープ企画書
- D) シールズに思う。あわせてドロップアウトコープの意味
- E) 8月22日イベント参考資料
- F) 第2回中津プロジェクトイベント報告
- G) 『資本論』輪読会の勧め
- H) 第六回社会センター研究会報告

附: ヒルファーディング『金融資本論』の貨幣論について

- I) スユノモ第9回国際ワークショップ関係

#### ○『季報唯物論研究』寄稿論文

- J) 利子生み資本における物象化

## まえがき

いま、60年安保闘争を上回る反安倍の政治闘争が巻き起こっています。9月中旬に強行採決が予想され、その後この運動がどうなるのか、私は陣地戦への切り替えをいかに実践できるかがカギだと思っています。ところで、この運動の底流はいうまでもなく3.11原発事故以来の反・脱原発の大衆運動ですが、これは反政府運動ではなく、いわば社会運動として展開されています。今回の反政府大衆運動のきっかけとなったのは5月からのシールズの運動（この運動体自体反原発運動にルーツがあります）でしたが、今回この運動の評価を試みる予定でした。つまりシールズの最初の声明とこれに対する韓国人留学生からの批判、そしてそれに対する野間たちのバッシングの問題、そしてそれにとどまらず、この声明に対するフェイスブックなどでの左翼からの違和感の表明、これらが大衆的反政府運動の発展の論理を理解できないでいること、さらには大衆運動を起こそうとする主体の側のさまざまな思想的弱点を指摘する側の、単なる認識改善運動的な弱さなど。

ところが作業を始めてみて、7月28日発行の豊下檜彦著『昭和天皇の戦後日本』（岩波書店）を読んでみて衝撃を受けたのです。この書は豊下の従来の研究、公開されたアメリカの外交文書にもとづく昭和天皇とマッカーサーとの関係の解明のみならず、日本で2014年9月に公開された宮内庁編集の大部のドキュメント『昭和天皇実録』（全61巻）の解説にもとづいて執筆されたものでした。そこでは日米安保体制が昭和天皇と官僚たちの主体的・主導的な国際反革命同盟形成への意志、ヘグモニーでつくりだされたものであったことが史実にもとづいて分析されていたのです。

従来戦犯として扱われることを回避すべく昭和天皇と官僚たちが立ち回ったことは知られてはいましたが、主体的に安保体制成立にかかわっていたことまでは理解されてはいませんでした。だから、60年安保闘争でも、ブントは、日本帝国主義自立論で安保条約破棄を主張し、共産党はアメリカへの従属、植民地化に対抗する民族独立を主張していたのですが、昭和天皇と官僚たちがアメリカとの国際反革命同盟形成をめざして主体的に政治をリードしたことについては認識されておらず、日本の権力分析において大きな欠落点を持っていたことを自覚させられたのでした。

つまり日本の戦後政治は、国際反革命同盟のもとでの戦後復興が官僚主導でなされたのですが、その権力の実体は、矢部宏治が『日本はなぜ、基地と原発を止められないのか』（集英社インターナショナル）で暴露したように、今もって継続されている「日米合同委員会」にあったのです。この会議の構成は外務省のホームページでも公開されているのですが、アメリカ側は在日米軍、日本側は各省庁の官僚で、政治家はいっさい関与していません。経済面では毎年提示される「日米規制改革および競争政策イニシアティブに基づく日本政府への米国政府要望書」がかなり広く知られるようになりましたが、「日米合同委員会」が日本の権力構造の頂点を占めていることの分析はいまだなされてはいないといつていいくでしょう。

こうして、私は『情況』誌新年号で官僚制特集を編集したのですが、その時に執筆者を見つけられず、その後も誰か研究者に依頼しようと考えていた戦前からの日本の支配階級としての官僚制分析に、自分で手をつけざるをえなくなったのです。こんな次第で今回はとても間に合わなくなってしまいました。

というわけで急遽「現場から」を掲載することとしました。私は昨年春からソーシャルセンター研究会（最初は「社会センター研究会」と名乗っていました）を開催して、日本におけるソーシャルセンターづくりがどのようにすれば可能なのかを参加者と一緒に考えてきました。その活動をまず報告します。

この活動は、ふり返ってみれば、三つのパートに分けられます。最初は『資本論』輪読の提起です。ついで、社会運動事典編集が提起され、これは具体化して研究会の手を離れました。そして最後にドロップアウトコープの構想です。ドキュメントはまず「A）ソーシャルセンター研究会中間報告」から掲載しています。これは9月12日中津文化祭の研究

会特集の場のために用意したものです。ついで8月22日の研究会の案内と付属文書類を掲載します（B～F）。そのあと『資本論』輪読会関係の文書類（G, H）、引き続いて「I）スユノモでの国際ワークショップ」関連の文書類が続きます。「H）第六回社会センター研究会報告」には、ヒルファーディング論をつけましたが、これは初稿で、訂正したものが本誌23巻第1号に掲載済みです。社会運動事典関係は出版社が晃洋書房に決まり、編集作業が始まっています。

最後の「J）利子生み資本における物象化」は『季報唯物論研究』に寄稿した論文で、9月10日には発行されるとのことです。

## A) ソーシャルセンター研究会中間報告

2015年9月12日 中津文化祭にて 境 裕

### 1. 研究会の経過

第1回 2014年6月29日13時半から21時まで

- 濱西さんの報告「ヨーロッパの若者と自律スペース」 会場きずな  
リレートーク
- 石田やわらさんの報告「フリーウィファイ、フリーソフト運動」
- 藤野郁哉さん「コーヒーショップ LEADなど5つのフリースペースについて」

第2回 2014年9月7日14時から21時まで 会場きずな

- 富山一郎さんの報告「接続せよ！研究機械」  
リレートーク
- 山本哲哉さんの報告「外山恒一の合宿に参加して」
- による（中村有希）さんの報告「『来るべき蜂起』読書会のこと」

第3回 2014年10月20日14時から21時まで これ以降会場空夢箱

- 高橋淳敏さんの報告「若者論について」
- 近所のシェアハウスと新しい物件の見学  
リレートーク
- 境 裕さんの報告 第5回韓日社会的企業セミナー参加報告

第4回 2014年11月22日14時から21時まで

- 渡邊太さんの報告「空間の持続と転回」

第5回 2015年1月22日14時から21時まで

- 境 裕さんの報告「資本論輪読会の薦め」

第6回 2015年2月19日14時から21時まで

- 境 裕さん報告「資本論輪読会の薦め」

番外編 2015年2月24日午後2時～4時 会場ソウルスユノモ

○スユノモNの皆さんと交流 李珍景さん、影本さん、シムさん、藤野さん、山本さん、水留さん、渡辺さん（東京から）、今津さん（現地合流）、境

第7回 2015年3月19日14活動報告 会場 以降も空夢箱

- 釜バトの「きんちゃん」の活動報告

第8回 2015年4月23日14時から21時まで

- 杉村昌昭さん『社会運動事典』について

第9回 2015年5月19日14時から20時まで

- 『社会運動事典』について、杉村昌昭さん、島和博さん、渡邊太さん、村澤真保呂さん

第10回 2015年6月23日14時から20時まで

- 『社会運動事典』について、杉村昌昭さん、渡邊太さん、丸井さん、村澤真保呂さん

第11回 2015年7月11日（土）午後2時より5時

(これ以降、共生型経済推進フォーラムと共に)

テーマ：中津のまちを考える——移住者とまちのありかた

○東 耕大さん (CAFÉ GO WEST !!!メンバー) 川邊 雄さん (Pirate Utopia パン屋)

靈崎信行さん (わが町中津を考える会 代表) 浦田和久さん (近畿労金地域共生推進室)

第12回 2015年8月22日(土)午後2時より5時、

テーマ：ドロップアウトコープの可能性

○藤野郁哉さん、櫻畠 敏子(さくはた あつこ)さん、池田啓一さん、永田千砂さん  
(予定)

第13回 2015年9月12日(土)午後4時～5時

研究会の報告及びドロップアウトコープについて

## 2. 研究会のふり返り

研究会を振り返ってみます。最初は社会センターとは何かという問題意識で、ヨーロッパの社会センターや韓国スユノモについて学びました。最初から参加してくれていた藤野さんが、中津の空夢箱を使えるようにしてくれましたので、3回目からはそこで実施していました。

研究会のコンセプトは「この催しを、社会センタースペースを実現する形で実行します。参加費が安い、食事ができる、後片付けも全員で、という、カフェ・コモンズで毎週金曜日にもたれているコモンズ大学のイメージで実施します。」というもので「いま」「ここで」社会センターを実現することを追求してきました。

もともとの人的つながりは、高槻市富田にある、NPO法人日本スローワーク協会のカフェ・コモンズで毎週金曜日夜に開かれていた「コモンズ大学」がつくりだしたもので、国境なき鍋団の人たちのネットワークが背景にありました。研究会のコンセプトは、私が数回参加した韓国ソウル市の「研究空間スユノモ N」が建物を確保し、そこで朝から学習し、昼と夜は食事を共にして、寝るところは別、というシステムを日本で実現できないかという問題意識で構想したもので、料理は私が勝手に提供しました。材料費は回収することまでは考えておらず、政府が所得再配分をちゃんとやらないので、個人的に所得再配分を実施するという気持ちでした。

研究会を重ねるなかで、ずっと疑問であった、スユノモ N がなぜコミュニーン（共同体）を名乗っているかが判明してきました。それは韓国のマウル共同体運動について知ることで了解できたのです。それで次のような「中津マウル構想」を提案しました。

「マウルとは韓国語でまち（地域）のことです。韓国ではマウル共同体運動が盛んです。共同体というと日本では寝食を共にするイメージですが、韓国では食事を一緒にするというイメージです。ソーシャルセンター研究会は、今年初めから空夢箱（オレンジカフェ）で毎月一回、研究会を開いていますが、座学だけでなく、食事も一緒にしてきました。韓流の共同体を作ってきたのです。そしてその共同体を外に開いていこうとする、マウル共同体運動をお手本に、中津でも、中津で場所を作り事業を開始しているひとたちに呼びかけて、食事を共にする機会をもちたいと思うようになりました。次の企画を提案します。」

「中津交流会の呼びかけ 2015年5月25日 ソーシャルセンター研究会

私たちは今年の初めから、空夢箱（オレンジカフェ）で毎月一回、ソーシャルセンター研究会を開催してきました。ソーシャルセンターとは、ヨーロッパで、都会の空き家や空き工場、公的建物などを占拠し、有効利用している場所のことです。私たちの研究会の目的は、日本でもこのような場所が作れないかということで、研究してきました。

中津の空夢箱で研究会を続けているうちに、中津商店街や、その近所でいろいろな店や居場所、シェアハウスなどが開かれていることが分かりました。再開発が進んでいないこの街で、事実上のソーシャルセンター的場所が散在しているのです。それで私たちとしては一度さまざまな場所を開いているみなさまと一堂に会し、懇談する機会をもちたいと思うようになりました。」

これは呼びかけてみたものの実現はできませんでした。中津で新しく店を開いて活動している人たちは結構忙しく、日程の調整が無理だったのです。しかし、このような呼びかけを実際にやってみたことから次の展開が生まれてきました。それがドロップアウトコープの構想なのです。

### 3. 研究会から見えてきたこと

ドロップアウトコープについては企画書などを参照していただきたいのですが、とりあえず、雇われて働くことを忌避している若者たちが、支え合って暮らしていくセーフティネットづくりが目的ですが、当面は食事のできる場所の開拓が課題です。私はこの活動が始まったのをみて、ここに日本型のソーシャルセンターのイメージを発見しました。ヨーロッパは空き家占拠、ソウルは賃貸物件ですが、空き家占拠が困難で家賃も高い日本では実現が難しい。しかし、多くの場所がつながりあうことで、ソーシャルセンターの機能を発揮できるのではないか。例えば自転車で行ける距離に毎週1回食事できる場を日替わりで7ヶ所開発できれば、事実上ソーシャルセンターがそこに存在することになります。それでこのようなイメージの提起で、これまでの研究会の中間報告として提起することにしました。

### 4. 研究会からの派生事項

派生事項は社会運動事典の編集です。当初は社会運動に役立つような企画を考えましたが、実際に出版するとなると、それでは引受手がないこと、またちゃんと売れなければ意味がないということで、日常用語100語をとりあげ、その普通の意味とは別の意味内容を描いて運動への誘いをやろうというコンセプトで進め、出版社も晃洋書房に決まり来春発刊予定で編集作業が進んでいます。

そもそもとの企画は出版できずとも、私家版ウィキペディアができていますので、ネット上で公開することができます。こちらの方も進めていきたいと考えています。協力者募集中です。

### 5. サードセクター論のために

ドロップアウトコープの向う先はサードセクターの形成です。最近よく聞く話が、サードセクターでの事業や活動を実行していると、体制側の補完物となるという批判です。これは、資本主義社会で生きている限りは、体制の補完物やその支柱としてしか存在できないという現実を無視した批判であり、少し反論してみたい。

このような批判をする人たちは、プロレタリアートを主体と考えており、非妥協的な政治運動を構想し実践している人たちが多いでしょう。しかし、少し考えてみれば、プロレタリアートとは、賃労働によって資本を増殖させ、そして消費過程では資本が生産した諸商品を購入することで、資本の価値の実現に寄与しているのです。体制の補完物というよりは体制の本質的支柱です。このような存在であるからこそ、逆に、体制を転覆させる可能性を見いだし、意識的プロレタリアートによる党形成と、政治運動による権力奪取という道が革命の戦術として採用されてきました。しかし、この道が大道であった時代が終わり、違う道が模索されなければならない時代にあっては、体制の本質的支柱であるプロレタリアートの反抗は、経済的隸属からの解放をめざして、脱資本主義に向かうのであり、サードセクターの事業主体として自己を形成して行くのです。そしてこれはグラムシの構想した陣地戦の現代的再生ではないでしょうか。

## B) 8月22日 第2回中津プロジェクトイベントのご案内

### テーマ：ドロップアウトコープの可能性

**話題提供者** 藤野郁哉さん  
櫻畠 敦子(はじはた あつこ)さん  
池田啓一さん  
永田千砂さん

### 日時：2015年8月22日（土）午後2時より5時、終了後交流会

会場：空夢箱 阪急中津駅北へ50メートル、セブンイレブン隣のオレンジ色のカフェ  
住所：大阪市北区中津3丁目4-33  
参加費：500円+カンパ（ワンドリンク込み） 交流会はカンパ制  
主催2団体：共生型経済推進フォーラム／ソーシャルセンター研究会  
連絡先 境 穀 メール [sakatake2000@yahoo.co.jp](mailto:sakatake2000@yahoo.co.jp) 電話 080-3139-7820

### 話題提供者のプロフィール

前回のイベントに引き続き、空夢箱で上記のような企画で集まりを持ちます。話題提供者のプロフィールを境が勝手にお伝えします。

藤野さんは、私が昨年春に社会センター研究会を呼びかけたときに来て下さった方で、神戸元町の高架下で、リードというカフェをやっておられ、その報告をしていただきました。その後ずっと一緒に研究会を企画してきて、昨年秋からは、空夢箱での開催となっています。藤野さんはこの一年で、シェアハウスや倉庫（勉強部屋に改裝中）やその他のスペースを確保して、それをバックにドロップアウトコープを構想しておられます。

櫻畠さんは、昨年から、カフェコモンズで焼いている石窯パウンドケーキを売ってくれていて、お名前は知っていたのですが、7月のブラックマンデーで名刺交換しました。ドロップアウトコープの推進者のひとりで、頂いた名刺には、各種歌唱活動、勝手にモデル活動を始め、15の活動が書かれていました。

池田さんは、古くからの友人ですが、阪神淡路大震災の時に芦屋で学習塾をやっていて被災し、生徒たちと一緒に救援活動をされていました。私は親戚が神戸市にあったこともあり、見舞いに行ってその現状を知って、エル・コープと連携していた神戸の生協都市生活の救援活動に参加しました。当時は1週間ほど神戸に滞在して、梅田に帰ってくるとビルがまっすぐ立っている風景が不思議に感じました。池田さんとは神戸で再開し、やがて池田さんは都市生活の救援組織、地域復興センターで活動されるようになり、現在は生協と関連する福祉の事業所で働いておられます。

永田さんは、共生型経済推進フォーラムの共同連のメンバーの紹介で知り合いになり、フォーラムの理事として一緒に活動してきました。ちまちま工房でデザインや企画などの仕事をしておられます。現在は箕面の桜井市場で障害者と一緒に豆腐づくりにも手を広げており、障害者と共に働く場づくりを実践しておられます。また、共同連が来年夏に大阪で全国大会を開催する予定ですが、その準備に取りくんでおられます。

### C) ドロップアウトコープ企画書

2015年6月末現在

#### 企画概要

「人よりも上へ」「みんなと同じことをしなければ」そんな焦燥感の中で生きていると息が

詰まる。

近年話題になっている「降りていく生き方」を実践するため  
誰もが気持ちよく生きるための「セーフティネットづくり」と「新しい生き方」の実験を  
提案する企画

### ①セーフティネットづくり

- 「かけこみ窓口」の連絡網をつくろう！  
既存の制度やサポートマニュアルをわかりやすくまとめたものを作成する。
- 「頼れる人」や「頼れる場所」の連絡網をつくろう！  
生活に困った・・・。仕事どうしよう・・・。などを相談できる連絡網を作成する。
- 「ハブになる人」を増やそう！  
友達が欲しい～寂しい～死にたいまで様々な行き詰まりをカバーできる  
「ハブ」のような役割の人を増やし、ゆるやかなネットワークで若者をケアしていく。

### ②新しい生き方の実験

- 「新しい生活」の実験・・・  
自分の生活を自分たちの手に取り戻すための実験。  
気が付いたら資本主義の中で、毎日消費を余儀なくされている生活。  
そんな暮らしを少しずつ見直していける実験を実生活でやってみる。
- 「新しい仕事」の実験・・・  
企業に雇用される働き方、のみではなく  
自分たちでコントロールできる仕事の発明と実験。

### ③その他のたくらみもろもろ

#### ■シェアハウス

一人だとすべて一人で支払わなければいけなくなっている  
「家賃」「水道代」「電気代」「ガス代」「ネット代」などを共有することで支出を減らす。  
相性はあれど、人との共同生活によって最低限の支出で生活できる可能性がある。

#### ■食事は複数人で

シェアハウス同様、基本的な出費を抑えるためには誰かと一緒に食事をすることが有効である。

食材代を月ごとに支払っておき、日々まとめて大人数分つくる。

これによってまた一段と生活費が浮く可能性がある。

#### ■おためしシゴト

いろんな事を考案して、生活のためにお金を稼いでみよう。

売れそうなものを作ってみて、人通りの多いところで売ってみたり、買ってくれそうな人のところへ売りつけにいこう。

お金を稼ぐ手段を持っている人を見つけたら、教えてもらおう。

## D) シールズに思う。あわせてドロップアウトコープの意味

——学生時代にデモや集会ばかりやっていて卒業できなかった境の私的体験から

境 肇

大衆運動は、起きるときに起こる。起きないときにはどんなに頑張っても起こせない。

60年安保闘争終了後の落差、学生のデモ参加者数千人から50名に。その後もあきらめずに大衆運動の準備をする。次の山は62年大学管理法案（大管法）反対闘争、その次は67年10.8以降の反戦青年委員会の運動、これは70年安保闘争まで継続した。以降は日本の大衆運動（典型的にはデモ）は、ずっと低調だった。世界中で盛り上がったイラク反戦も日本では大衆化せず。さすがに2011年3.11原発事故は日本の運動を変えた。以降日本の原発反対の大衆運動は日常化した。これが底流になって、安倍の戦争立法に反対する大衆的政治運動が今年になって起きている。この運動は衆議院での単独採決では終わらない。少なくとも9月いっぱいは継続する。大衆運動にはそれ自体の論理がある。

大衆運動が継続しているときに、その運動の先鋭化で勝利しようという考えは私にしみついているが、それは今回は難しいだろう。むしろ今回の選挙で自・公を引きずり下ろすという道が開けている。戦争をしないさせない1000人委員会を各地域につくり、それを陣地として選挙で政権交代を実現することは可能だ。しかし、私はこのような政治的展望だけでなく、市民社会での陣地戦に注目したい。つまりデモに参加する人々が、日常的な生活を変える試みに取り組めるかどうか、という問題だ。

私は、やっと80年代後半からこのような活動に取り組んできた。成果はと言われば、まだ大きくはない。おおぜいの仲間たちと、生協設立に取りくみ、NPOで福祉サービス事業を開始し、さらには昨年からは、若者たちのソーシャルセンターづくりの活動の支援を開始したばかりだ。残念なのは、60年安保闘争終息後から、このような活動に取りくめなかつたことだ。25年の遅れを取った。

今回の政治的大衆運動の背景には原発事故がある。だから日常的な生活を変えていく取り組みは、時代に適合している。私はその一つ一つをつなげることに余生を捧げたい。

時代の変遷を簡単に振り返れば、70年代は革新自治体の時代であったが、企業には余裕があり、石油ショックを乗り切って輸出で外貨を稼ぎ、世界で一人勝ちして80年代にはバブル時代を迎える。しかし、90年代に入って「失われた・・年」で過去の高度成長は再現せず、低成長の時代に入った。それだけではなく、ソ連・東欧崩壊後の世界的な新自由主義の席捲とグローバルな資本移動は、資本主義の新しい段階をつくりだし、架空資本が現実資本に対して優位に立つシステムが構築され、多国籍企業ですら、株主への配当を第一とする株式市場への「貢君」に変質し、経費削減の目標を人件費において、賃金の削減と正規雇用の非正規・派遣雇用に切り替えていった。その結果、労働者の再生産（結婚や子育て）を困難にすることで、市民社会の崩壊を促進している。

こうして現在の若者たちには、仲間との自助努力で事業を起こし、もう一つの生活を追求していくしか人間らしい生活は望めなくなってきたように思われる。協同組合の原点は、仲間を募り、少額でも出資して必要な事業を興していくことだ。生活協同組合は、70年代に續々とつくられた、都市の団地での商業施設の貧困さに、生活者たちが自助努力で問題解決しようと立ち上げたものだ。

いまの若者たちの困難は、商業施設が飽和し、非正規・派遣労働での長時間単純労働でも暮らしていくコンビニがあり、ネット環境も充実して、SNSで友達になれる、というように一見「豊か」な生活環境がしつらえられているようだ。しかし、住宅費が高く、教育費が高く、通勤時間は長く、通信費も高く、長時間単純労働が嫌でもそれで働くないと生活できない、という現実だ。居場所すら見つけられず、孤立した人々が、親世代に比べて豊かになれるとは考えられず、老後の年金もかけた額も返ってこない。このような資本主義現実を、超えて生活していくシステムの形成が、人々の豊かさを実現できるための課題ではなかろうか。

## E) 8月22日イベント参考資料

2015年8月18日 境 豪

話題提供者のみなさまへ

当日の進行ですが、ドロップアウトコープ設立に向けて知恵を出し合いたいと考えています。参考資料として用意しました。

### 1. エル・コープ設立の経過

1988年9月 協同組合運動研究会の立ち上げ

12月 「もう一つの生協を・・の会」を発足させる

1989年 産地訪問 みかん、牛乳

1990年 産地訪問 紅茶、有精卵

8月 ミカンの木のオーナー制に取りくむ

1991年1月 試し供給を始める

5月 専従職員一人置く

7月 「もう一つの生協をつくる会」に名称変更し、世話人会を設ける

9月 専従職員2人に。

10月 生協の名称公募 エル・コープと命名

12月 エル・コープ準備会結成総会

1992年2月 配送体制の切り替え

5月 提携先の大坂事業連から商品が供給され始めた

10月 設立発起人会発足、設立趣意書作成、2000名の賛同署名を集める

1993年3月 エル・コープ設立総会

7月 設立認可

9月 法務局登記 この日を設立日とする

10月 生協エル・コープとして事業開始

### 2. 22年間の経過

組合員数：1334名——>6000名

事業高：9千6百万円——>11億円

出資金：1千8百万円——>3億5千万円

### 3. ドロップアウトコープ設立について

① このコープに相当する協同組合の法人格は存在しない。

② 幅広い人々に呼びかけることが必要だから、生協法人立ち上げの経過が参考になる。

それは、準備会を発足させ、設立趣意書と事業計画の策定と事業の先行開始、そして、設立賛同署名集めなど。

③ 法人格が必要となれば、一般社団が適當だと思われる。

④ 肝心なのは事業計画。どのような事業がたち上げられるか。

### 4. 事業計画について（すでに身近にあるものから出発）

① 野良研がらみの事業（含むシェアハウス）

② 抱点の食堂事業（含む窓口、セーフティネット）

③ 生産と消費を結びつける供給事業

④ 障害福祉サービス事業

⑤ 介護事業（含む助け合い）

⑥ ネットでのリサイクル事業

⑦ ものづくり

⑧ 働き手の派遣

⑨ その他

## F) 第2回中津プロジェクトイベント報告

2015年8月23日 境 豪

### 1. 進行

8月22日に、共生型経済推進フォーラムとソーシャルセンター研究会共催のイベントが無事終了しました。参加者は10名。企画は以下の通りです。

テーマ：ドロップアウトコープの可能性

話題提供者は、藤野郁哉さん、櫻畠 敦子(はじめた あつこ)さん、池田啓一さん、永田千砂さんでした。藤野さんからドロップアウトコープの趣旨説明があり、話題提供者は、それぞれの自己紹介と、このコープへのかかわりについて報告しました。その後出席者全員で議論となり、結論的には、当面既知のカフェなどで、一緒に食事できる場を開いていくことに力を入れることになりました。情報をまとめ、どのように発信していくか、ということも話題にはなりましたが、具体案と事務体制については検討できていません。

なお、境からは添付の資料、エル・コープ設立の経過等を配布しました。

### 2. 感想

前回の感想で書いたように、話題提供者としてお招きした方々との懇談と懇親が大事ということで進行しました。今回の議論で、日本型ソーシャルセンターのイメージが明らかとなったように思います。空き家やまちの区域などの占拠ではなく、渡り歩ける場所の開拓から始めるのです。例えば、現在中津の空夢箱で毎週月曜日に行われているブラックマンデー(500円で食べ放題)的イベントを曜日をずらして近隣のカフェで実施できるようになれば、毎晩どこかに出かければ、安く食事でき、友達にも出会えるし、知らなかつた人とも友達になります。そしてこのつながりを土台にいろいろな事業や活動が芽ばえて行くのではないかでしょうか。

参加者の次の発言が印象的でした。自分は勤めているときには、マンションを借り家賃等々で20万円くらい払い、一人なので寂しくて居酒屋に行ってそこそこのお金を使う。でも一人暮らしの寂しさはぬぐえない。仕事を辞めて、シェアハウスを放浪するようになって、安く食事ができ、友達もでき、稼ぎは少ないけれども充実している。

もともとイギリスではパブでの話し合いからいろいろな出来事が始まっています。日本型ソーシャルセンターは、ブラックマンデー的場の横つなぎから始まるのではないか、という感想を持ちました。

実務報告です。今回の参加費と交流会収入は7,445円。ここから、「カフェ&バー、ウロウロ」の食材費2,000円とワーク代5,000円を払いました。私が作っていった料理のメニューは、毎回おなじみの、ローストビーフ・生ハムサラダ、ナスとニシンの煮物、長唐辛子の煮物、カボチャ煮付け、モロヘイヤ胡麻和え、黒枝豆、カマスとサンマのひもの。このうちサラダと黒枝豆は、「ウロウロ」さんに調理してもらっています。「ウロウロ」さんは、スープとパスタでした。

あと、野良研の課題であった、廃屋のメンテが進んでいました。2階は宿舎に、1階は会議室兼勉強部屋の予定のようです。

### 3. 次回の企画

次回は、中津文化祭に参加します。9月12日(土)午後4時より6時、空夢箱です。

テーマ：一緒に食事することの意味

文化祭で人が入れ替わることが予想されますので、報告するという形ではなく、藤野郁哉さんや櫻畠 敦子(はじめた あつこ)さんを中心に「一緒に食事することの意味」について参加者から意見を求めて行く形で進行します。

近いうちに案内を差し上げます。

## G) 『資本論』輪読会の勧め

2015年1月6日 境 肇

1月22日午後2時から、中津の空夢箱で、『資本論』について、輪読のオリエンティションをします。社会センター研究会の次回の企画です。これは参加される皆さんと、それぞれの身近なところで、『資本論』の輪読会を始めることを前提にしています。将来的には月一回、輪読会の参加者が集まるフリーな討論の場として継続していけたらと考えています。

この輪読会の勧めを書こうと思ったきっかけは、『フリータズフリー』第3号を読んだからです。そこでは左翼の運動内部でのセクハラ、パワハラが描かれていますが、これは単に差別意識にもとづくだけではなく、路線上の差異に対する嫌悪感が背景にあるように思つたのです。左翼はいわゆるマルクス・レーニン主義の影響を残していて、党派政治の論理に呑みこまれているケースが多い。そうすると、自分たちの価値観と異なる考え方に対して排除しようとしてきます。この排除の行動が、差別意識に乗っかった形でいじめ的になされているように思われます。

ですからこれに対抗しようとすれば、自らの路線を明確にするほかはなく、そのためには現実の資本主義の運動を把握する思想的力を鍛えるしかありません。『資本論』はマルクスの作品ですが、これはマルクスの思考産物でありながら、現実の資本主義の運動がそこに記述されているという稀有なテキストです。今日の資本の運動の理論的把握は、このマルクスのテキストに接するところからしか始まらないと私は考えています。

マルクスは弁証法の達人でしたが、それは自分の思考を、自分の外部の存在（資本主義）の論理的展開の場として維持するところにあったように思われます。マルクスが思考しているにもかかわらず、そこには資本主義の運動と論理が描き出されている。『資本論』の輪読会は、マルクスによって描かれている資本主義の運動を理解しながら同時に、マルクスの思考を学ぶことで、今日の資本主義の運動を把握できるように、自らの思考力を鍛えることが目標となるでしょう。そんなことで、とりあえず『資本論』の輪読会を始めてみませんか。

いま『資本論入門』等で世界的に有名になっているデビット・ハーヴェイが『資本論』に取りくんだけは30代になってからでした。日本でも70代をすぎた人たちが『資本論』解説に挑戦しています。誰でも参加できるのは、このテキストが自分たちの生活環境である資本主義をテーマとしているからであり、日常体験している事柄の解明であるからではないでしょうか。

## H) 第六回社会センター研究会報告

2015年2月21日 境 肇

社会センター活動は、2015年2月19日14時から21時まで

### 1. 進行

『資本論』輪読が始まっています。第一章、第一節だけで、5時間かけて輪読したという報告がありました。あと一人でどんどん読んだが、理解は困難だ、という感想もありました。感想を語り合った後、私の方からヒルファーディングの『金融資本論』の貨幣論について報告し、また新自由主義についても、レジュメに従って問題提起をしました。

### 2. 感想

このいわゆる価値実体論、商品の使用価値と交換価値とを分析して、価値の実体が抽象

的人間労働であることを導き出す思考の論理は、だまされたような気がします。それはそのあとでの、価値形態論で展開する論理との関連で見ておく必要があり、そのポイントは、思考の論理と存在者が持っている摂理とは根本的に異なっているということです。思考の論理は対象を分析し、細かく分けて単純なものに還元し(下向)、次にはそこから上向して、分解したものを組み立て、総合することで概念を得ます。しかしこの思考の作用は、現実の対象が存在する様式そのものではありません。

商品の価値形態の分析から知ることは、諸商品は関係をもつことでお互いに抽象し合っています。思考では分解することが抽象作用でしたが、ここでは関係し総合することで抽象化がなされるのです。この商品のいわば「思考」を認めたうえで、価値実体論では思考の論理によって価値実体を抽出しているわけですから、すっきりしない点が残ることになります。また商品は社会的象形文字として存在し、個々の商品がいくらの価格をもつかという判断が、人間に対して表示されます。諸商品は総合によって抽象しあい、その価格を社会的象形文字として人間に告げる概念的存在なのです。ですから商品所有者たちは、商品に自分の意志を宿すことができるのです。

およそこんなことをしゃべったような気がします。ヒルファーディングについては今の私の懸案ですので別途文章化しておきます。

### 3. 次回の企画

次回は、この間研究会に参加している釜パトの「きんちゃん」にお話ししていただきます。また、『資本論』輪読会からの報告も予定しておきます。

日時：2015年3月19日（木）午後2時より8時ころまで。

会場：空夢箱（中津）

進行：話題提供「野宿者たちとかかわって」 釜パト「きんちゃん」

リレートーク、交流会

## ヒルファーディング『金融資本論』の貨幣論について

境 裕

### 解題

これは、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって商品から貨幣が生成され、これ自体が商品という物象による人格の意志支配である、という見地からの批判です。

### 1. 金廃貨論、ドル本位制の定着

私はいま取り組んでいる最中の、ヒルファーディング『金融資本論』について報告しました。彼は、新しい経済現象である金融資本の成立について、信用制度から解明しようとし、貨幣の必然性から説き起こして、金本位制廃止後の紙券本位制の分析、支払手段としての貨幣の機能から、商業信用、銀行信用の分析へと進め、株式会社論を展開して、金融資本（銀行と産業との癒着と独占の成立）を解明しました。ここではとりあえず、彼の貨幣の必然性論に絞って批判を試みてみます。

今日の国際通貨ドルは、不換銀行券ですが、1972年の金ドル交換停止までは、ドルは固定相場制で、金とリンクされていました（アメリカ国内ではドルは不換銀行券でした）。ところが、ヨーロッパと日本の戦後復興と、諸国の産業資本の競争力の強化によって、アメリカ産業が立ち遅れ、輸入が増大しているときに、フランスなどは減価しているドル債券を受け取るよりは金を求め、こうしてアメリカからの金流出がおき、「ドル危機」に見舞われたのです。これに対して、ニクソン大統領が金・ドル交換停止の措置を取り、以降、ドルはどうなるか、注目されましたが、数年の経過を経て変動相場制に移行し、その後もドルは国際通貨としての役割を果たしてきました。

ニクソン・ショックの時には、「IMF体制の崩壊と世界金融危機」が研究者たちから予想

されましたが、現実はそうはならず、金と関連を断ち切られたドルが国際通貨として通用していることから、もはや金は貨幣ではないと見なす「金廃貨論」が台頭しました。岩野茂道著『ドル本位制』(熊本商科大学研究叢書、1977年) や『金・ドル・ユーロドラー』(文眞堂、1984年) は金廃貨論の上に「ドル本位制」を主張し、これが市民権を得ています。

## 2. ヒルファーディングの貨幣の必然性論

ところでヒルファーディングの『金融資本論』を読み返してみて、彼こそが金廃貨論の原型を提起していることがわかりました。それで今日の金廃貨論の批判の前提として、彼の説の批判を試みます。

彼は貨幣の必然性について、『資本論』の価値形態論の一般的価値形態の分析に注目し、それに依拠して次のように述べています。

「人間たちが共同して、彼らの仲間の一人に、彼らの名において特定の諸行為をなす資格を、認めるように、商品たちもまた、その名においてこの商品世界における市民権——完全市民権または不完全市民権——を受ける商品を彼らの側で認証するために、共同せねばならない。しかし、諸商品が共同しうる唯一の形態は、それらの交換である。なぜならば、社会主義社会における社会的意識にあたるものは、資本主義社会では市場における諸商品の社会的行為だからである。市民的世界の意識は、市価表に還元されている。ただ交換の成就を通してのみ、個人は全体の法則を経験する。個人が交換に成功したときにのみ、彼は、社会的に必要なものを生産したという証明をもつ。ただそのときにのみ、彼は新たに生産を開始しうる。かように諸商品の共同行為によって、いっさいの他の商品の価値を表現する資格を認められている物、——これが貨幣である。商品交換そのものの発展とともに、この特別な商品の資格認証も同時に発展する。」(25~6頁)

彼のこの内容は、人間たちの共同行為と、商品の共同行為とを並列している点で彼の問題意識を読みとれます。商品の共同行為については、マルクスの分析の正確な継承であり、間違いはありません(『資本論』一般的価値形態、1. 価値形態の変化した性格、5段落目参照)。ただ『資本論』と異なる点は、マルクスが価値形態論で展開している内容を、交換過程を想定して論じている点です。そして、ここから次のように展開していくときに、疑問点が生じます。

「共同意識を欠くにもかかわらず一つの生産共同態であるところの、分業と私有とによってその原子に分解されている社会では、生産者たちはただ彼らの物的生産物の媒介によってのみ相互に関係し合うということ、このことが今や、彼らの労働生産物は交換価値としてただ同じ対象——貨幣——の相異なる諸量を表示するにすぎないということになって現われる。一般的労働時間、すなわち生産共同態の経済的表現、したがってまたこの共同態という事実そのもの、それが、今や、一つの特別な物として、すべての他の商品と並列するとともにそれらとは別のものである一商品として、現われる。」(30頁)

このような認識はまだいいのですが、ここで述べている貨幣の価値尺度機能が、意識性として把握されていくのです。

「しかし、この社会的な面は、意識的社会的規制によって、または、商品生産社会の意識的機関は国家であるから、国家的規制によって、直接的に表現される。国家は、特定の標章——たとえばかかるものとしてしづけられた紙片——を、貨幣の代理物、貨幣標章として、制定しうる。

これらの標章はただ二商品間の流通の媒介者としてのみ機能しうる、ということは明らかである。」(38頁)

つまり、諸商品の共同行為によって貨幣が生成され、価値尺度がなされて商品が価格をもつのですが、一旦こうなると、この社会性は、国家として存在している人々の意識性を表現する機関によって規制しうると見ているのです。そして、価値標章による金の代置が、流通手段としての代置だけでなく、価値尺度の代置として考えられているのです。

「流通の最小限については、この無政府性が、いわば排除されている。・・・・無政府的

生産の排除が、単なる価値標章による金の代置の可能性において、現われるのである。」(39頁)

このように、金本位制に代わる「純粹紙幣本位制」(40頁)における紙幣の役割を金の代置と見ることで、紙幣の価値規定を、諸商品の価値の反射として説明して行きます。ここからカウツキーによって批判された、「社会的流通価値」論が展開されていきます。

「言いかえれば、強制通用力をもった純粹紙幣本位制の場合には、流通時間が不变ならば、紙幣の価値は、流通において取引されねばならない商品価格総額によって、規定されている。紙幣はここでは金の価値から全く独立したものとなり、次のような法則に従って諸商品の価値を直接に反射する。すなわち、紙幣の全数量は（諸商品の価値総額／同名の諸貨幣片の流通速度）に等しい価値を代表する、という法則である。」(41頁)

カウツキーはこのような「社会的流通価値」論に対して、「貨幣商品がただ単に流通手段としてではなく価値尺度としても、紙幣によって置き換えるかの如く云う」「これを踏まえると——商品の本当の価値尺度は貨幣ではなくして、貨幣のほんとうの尺度は商品だ——ということにほかならぬ。」(松井安信編著『金融資本論研究』北海道大学図書刊行会、1983年、57頁)、と批判し、さらに後日には、「紙幣を価格標章＝金標章としてではなく、商品価値標章として理解している」(同書、59頁)と述べ、ヒルファーディングが、貨幣の価値尺度機能と、その価格の度量基準とを混同していると指摘している。確かにヒルファーディングは次のように述べているので、カウツキーの批判は的を得ている。

「理論家たちを愚弄するものは、貨幣が、価値尺度であるというその属性を、外見上は保持している、という事情である。もちろん、相変わらずすべての商品は貨幣において表現され、『計られる』。貨幣は相変わらず価値尺度として現われる。しかし、この『価値尺度』の価値の大きさは、もはや、価値尺度たる商品の価値によっては、金または銀または紙の価値によっては、規定されていない。むしろ、この『価値』は、現実には、流通せられるべき商品の総価値によって、規定される（流通速度を不变とすれば）。現実の価値尺度は貨幣ではなくて、貨幣の『通用価値』は、私が社会的に必要な流通価値と名づけたいと思うものによって、規定されている。」(56~7頁)

ところで、カウツキーの批判によつては、今日の金廃貨論の批判には届かない。というのも、銀行券が価格標章＝金標章としては存在しないからだ。ヒルファーディングの金が価値尺度としての機能を失っているというこの引用文にある主張を覆すためには、別の批判的視角が求められています。

### 3. ヒルファーディング貨幣論への批判（覚書）

彼の貨幣の必然性論は、意識的に組織された社会（社会主义）との対比で無政府的な社会である資本主義を論じ、貨幣の必然性を論じているのですが、その大枠は、諸商品の共同行為によって貨幣が生成される、という把握に立ちながらも、「諸商品が共同しうる唯一の形態は、それらの交換である。」と捉えたことです。『資本論』の交換過程論では、登場するのは商品の保護者としての商品所有者であり、そこで論じられているのは、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為です。商品所有者たちは、交換過程では、一般的価値形態で表現されている、諸商品の共同行為を、諸商品に自分の意志を宿すことで実現し、貨幣の価値尺度機能を作用させて、商品に価格付けをするのです。

この諸商品の共同行為が、商品所有者たちの共同行為に転化して行く仕組みが、商品という物象による人格の意志支配であり、だから、意志支配されている人格からすれば、その共同行為は決して意識的な行為ではないのです。ところがヒルファーディングは、諸商品の共同行為を直接に商品所有者たちの共同行為と捉えているために、この商品所有者たちの意識性が国家の意識性と把握されてしまうのです。

岩野の「ドル本位制」は、たくさんの国民的通貨が併存している中で、ドルを一般的国際通貨とするという合意にもとづくものと捉えているのですが、これはヒルファーディングの諸商品の共同行為論を直接に人間の共同行為とみなすという発想の枠内にあります。

あともう一点、次の『資本論』のくだりが金廃貨論の証拠として出されています。

「価格形態は、貨幣と引き換えに商品を譲渡する可能性と譲渡する必然性とを含んでいる。他方、金が観念的価値尺度として機能するのは、金がすでに交換過程において貨幣商品として動き回っているからにほかならない。だから観念的な価値の尺度のうちには、硬い貨幣が待ちかまえている。」（『資本論』新日本新書1、177頁）

つまり「交換過程」を流通過程とみなして、流通過程では金が貨幣として動き回ってはいないから、価値尺度としても機能していないという論拠です。しかし、これについては、初版では次のようになっています。

「価格形態は、貨幣と引き換えに諸商品を譲渡する可能性と、この譲渡の必然性とを、含んでいる。他方、諸商品の価格規定は、交換過程のなかにある一商品、すなわち金を、すでに貨幣にしてしまっている。だから、観念的な価値尺度のうちには、硬貨が待ち伏せしているのである。」（『資本論初版』、江夏訳、92頁）

マルクスにとっての「交換過程」とは「流通過程」とは区別された、商品所取者たちが、商品に価格付けをする過程です。そして諸商品に価格がつけられたという事態は、金の価値尺度機能の発揮の結果であり、金が貨幣として機能しているということであり、かつこの金の機能の発揮に関しては、観念的なもので事足りるのであります。現行版の文言、交換過程で動き回っているということは、価格付けのために商品所有者たちによって、金が交換過程で価値尺度として動員されているという事態を指すのであり、けっして流通過程が想定されているわけではないのです。

以上はとりあえずの見取り図です。

## I) スユノモ第9回国際ワークショップ関係

### 1. ワークショップの企画

日時：2015年2月23日（月）～27日（金）5日間

場所：生命文化研究所（延喜洞193-16 東亜ビル4階）

※通訳と資料集（有料）が提供されます。

富山一郎をまねいて下記のプログラムで午後6時からセミナーがもたれた。

2月23日 フランツファノンの思想：「知」の問題（公開講座）

2月24日 暴力の予感とは？ - 沖縄の問題について

2月25日 癒着（流着）と境界 - 含意の政治学

2月26日 ポスト植民地主義の現在と未来

2月27日 研究機械のために - 現代日本の大学と文化研究

### 2. 李珍景との哲学対話

スユノモNの李珍景さん（『不穏なるものたちの存在論』の著者）と対話する機会があつた。通訳は影本さん

境：李珍景さんのワークショップでの発言の報告書を読みました。富山さんの報告は暗い運動のイメージですが、明るい運動のイメージも含まれているほうが良いという提言には同感です。改めてお聞きしたいのは、自分は現象学の意味は良くわからないのですが、あなたの報告を見る限り、ハイデガーの議論は、いまの資本主義社会における様々な現象の記述である、と理解しましたがいかがでしょうか。また、ハイデガーのナチス加担の問題を批判しているレヴィナスが、思考の暴力性について執拗に追求していますが、どのように考えますか。

李：ハイデガーだけじゃなくて？ 質問の意味 자체が把握できない。

境：僕のハイデガー理解じゃなくて、李さんがここに書いているハイデガー論をみたら、実はハイデガーは単なるブルジョア的現実を述べていると言つてるように受け取った。それでいいのでしょうか。

李：それだけじゃなくてハイデガーには近代社会に対する批判があるみている。前近代からの共同体に対する愛着があつて、それが近代に喪失してしまつた。そういう意味での近代批判。近代批判でマルクスと同じような側面もあるけど、ハイデガーの場合はマルクスのような批判をしたのではなく、人間と自然、マルクスの問題が資本関係がだめだと思ったとすれば、ハイデガーは自然と人間の間の関係に問題をみた。違う方向からの資本主義批判ではないか。

境：ロマン的批判という領域になるのですか。

李：そんな意味もありますけど、ハイデガーは複雑な側面があるので。

境：ハイデガーについてレヴィナスからの批判があります。これをどんな風に考えていますか。

李：レヴィナスからの批判は、主に主体という概念を通じて、主体の意志で世界を、自分の意志によって変えるということを批判しました。これはハイデガーが近代を批判したことと同じような感じです。ハイデガーは近代化の問題として批判したから、同じじゃないけど、同じような方向だったと思う。レヴィナスはマルクスよりはハイデガーに近い。

境：レヴィナスはハイデガーのナチス加担という問題があるから、論理の限界、論理の危険さを必死に考えた人で、それを象徴的に表現しているのが「顔」。人間の論理は暴力みたいなもので、論理イコール暴力という話と、「顔」は汝殺すなかれという顔をしていて、倫理になるわけ、だから倫理の方が根底的で、論理が二次的という、そういう知を確立しないと人間はダメだと言つたんじゃないかなと思っています。

山本：レヴィナスのハイデガー理解がそもそもずれている。レヴィナスが批判対象としているハイデガーは基本的には『存在と時間』、この本で書いた目的連関を強調する配慮は、ハイデガーが後には捨て去る立場だから、レヴィナスのハイデガー批判とはハイデガーの批判にはなっていない。

境：レヴィナスのハイデガー批判は正しいかどうか。

李：そういう理解のされ方は基本的にあつてゐる。山本さんが言ったように『存在と時間』に対するレヴィナスの批判は妥当している。『存在と時間』は男性的であり、強者のあり方、実存的本質に到つた人物、そして主体は自分で世界を獲得しているという意味で、レヴィナスが批判したのは、全くそう。ハイデガーが言った労働ではなくて、労働に対してレヴィナスは同じような形で批判をします。レヴィナスはマルクスについては言及していない。労働についても同じように批判したが故に、他者の顔を通して倫理に到ろうとする。実際、後期ハイデッガーは、そういう立場を棄てて、フォーゲ＝「下に置く」。科学技術によって世界を変えることを超えて行こうとした。後期ハイデガーは、存在の声を聞いて、存在が近づいてくるのを待つということをやつて、そのスタイルはレヴィナスともものすごく通じる。レヴィナスが批判したハイデガー批判と通じる。

境：僕はレヴィナスから一步進んで、論理は思考の属性でしょう。思考は論理だが、存在そのものの方は、論理と区別すると摂理、論理とは違う構造をしている。思考の論理と存在の摂理。それを一緒にしているのが、エンゲルスがそうだし、普通みんなそう思つてゐる。論理が自然にあるから自然弁証法という。そこは違うと僕は思つていて、違うということをレヴィナスは言って、論理と倫理を分けた。むしろ存在そのものの摂理と思考の論理は全然別で、存在そのものの摂理がどういうものだというところの解明をやらないといけない。それが拙著『「資本論」の核心』で言いたかったことの一つです。

李：自然の摂理ですが、そういうのを考えることは科学とか、法則、論理の中に自然を込める、入れること、入れ込むこと。人間概念の中に自然を容れること、摂理とは入れることではない。自然とはそもそも他者性であり、外部性、考えの外にあるものであつて、エンゲルスのように科学主義を用いて、自然と人間を一致させていくのは、外部性の否定

である。エンゲルスのような考え方の否定のために、ハイデガーが言ったことは意味がある。人間が持っている同一視、同一させるという思考の力から、自然の他者性をおそらく言っていて、それ故にハイデッガーは簡単には捨てられない。

境：ハイデガーの「同一性と差異性」という論文は結構面白い。

李：ハイデッガーとマルクスの近代批判の方法は違うけれど、人間と自然の関係を同一化させないと批判しているので、自分はハイデッガーの立場に立つつもりは全然ないけど、ハイデッガーの側面から考えることは避けられない。どういう風に接近するのかが課題じゃないかな。

私もマルクス主義の文献はたくさん見てきたけど、マルクス主義とは基本的に資本主批判をする時に、生産関係において批判をよくしてきました。しかし生産力そのものについての批判を見たことがないし、革命とか言う時も生産関係のみを変えようとしてきた。史的唯物論はそもそもすべてが関係であると言っているし、生産力もやはり関係である。ドイツイデオロギーで人間と自然の関係といってたように、社会主義というのは人間関係が変わるものでいいのか、生産力も変わらないといけないのじゃないか、誰も問うていなかった。レーニンとかに到ると働くだけ働いて、得るだけ得るところになると、それは生産力が増えることが前提になっている。生産力批判という側面から社会や世界を見る点が、マルクス主義には欠如していたのではないか。マルクス主義のハイデガー批判は、生産力批判がなかった。マルクス主義自体が持っている、生産力批判がないという、欠如があるためにマルクス主義によるハイデッガー批判はそこが弱点になるのではないか。

境：ハイデガーとレヴィナス、どっちを選ぶとなったら、僕はレヴィナス派になるけど。マルクスの批判をされたけど、生産力の批判ができるとは思ないので、マルクスに対する批判はその通りだと思う。生産力の批判は元々フッサールのデカルト的云々があつて、それが生活世界を隠ぺいしていると言っていて、その問題だと思う。その観点がハイデッガーでは弱くなつたかなと思う。少なくとも『存在と時間』しか検討していないくて、後期はあんまり読んでいないから、何とも言えないけど。そんなことでレヴィナスに寄りかかっているという現状がある。生産力の批判に関しては、緑、グリーンがやっている。今沢山出てきている。しかし、自然の摂理と人間の思考の論理、これを一緒に見る思想上の大きな欠陥があるような気がする。だからエコファシズムになる。

李：ハイデッガーもエコファシズムに属すると思います。ナチスが実際エコに興味を持っていた。何故そうなったか、生産力批判を共同体的、自然なり故郷みたいなものを機械文明と対比させたためで、そういう方向で批判したため。自分は逆に機械主義の観点から自然と機械、自然と文明、生命と生命なきもの、を批判してみたい。機械なら機械、自然なら自然、スピノザの理論で、機械が自然ではないものみたいな、完全に同じではない。機械なら機械、自然なら自然であって、機械と自然が別なものとしてあるわけではない。ドゥルーズが人間の口も機械だといったし、すべてが機械になるわけで、自然と人間あるいは自然と機械というものを越えて、機械と機械、自然と自然という関係において本質を変えていくことが重要じゃないか。政治経済学と同じ位、生態学的批判が必要。人間と自然の関係は重要なテーマである。

機械は自然じゃないという観念が間違っていた。スピノザ的な意味で自然という概念にはあらゆることが含まれている。ドゥルーズ・ガタリは一般化された機械主義という概念、あらゆることが機械だということ。一般化された自然主義とスピノザの一般化された機械主義は同じだと思います。機械、文明から自然に返ること、そんなことでは、必然的にエコファシズムになる可能性がある。機械主義的な観点から生態学を批判する必要がある。政治経済学批判が必要なように、生態学（エコロジー）批判が必要だと思う。

境：機械の話が出たので、ヴィーコは、人間が言う科学的真理は人間が作ったものにしか妥当せず、自然はその外にある、と言っている。そういう理解ではだめなのか。

李：人間が作ったものも人間は理解できないし、人間がつくったものは人間の理解を越えていく。

境：原発がそうですね。

### 3. ゴルディアスの結び目（覚書）

2015年2月26日 境 育

#### 1. まえおき

非常に楽しい三日間が過ごせて、スユノモの皆さん、富山さんに感謝しています。いろいろ頭をめぐっていた問題があり、最終日の討論にメールで参加します。

タイトルの「ゴルディアスの結び目」、ギリシャ神話のあらすじについてはウィキペディアで見ていただくとして、「解きほぐせない問題」のメタファーであり、私は最初の二日間、富山さんの報告を聞いていて、子どもの頃に読んだ「ゴルディアスの結び目」を思い出し、アレクサンダー大王のように結び目を切断したいという誘惑に耐えていました。

私自身もこの結び目を抱えており、それは左翼はなぜ敗北したか、という問いで、私はかれこれ50年以上、この問題にとりつかれています。誰かが切断してくれることを待ち望んでいるわけです。富山さんがどうかは分かりませんが、私なりの切断を試み、最終日の議論へのメールでの参加をします。

#### 2. 一つの切り口、フーコーの「まなざし」の一面性

富山さんの「尋門空間」は、フーコーの「まなざし」と同様、尋門する側、調べる側、権力側、つまり見る側の「まなざし」で、見られる側の「まなざし」の意義が顧みられてはいないように感じました。「尋門空間」も、富山さんも認めているように、ある種のコミュニケーション空間であり、権力作用の相互性があります。とすれば、見られる側の「まなざし」の特徴を押えることが求められるでしょう。これについては、アダム・スミスの『道徳感情論』に影響されて、デューイが、対面関係で、見られる側が、「一般的他者の態度」を取得することで、社会関係が成立するという意味のことを述べています。これが市民社会生成と存続の条件というわけです。これを反面解釈すると、見られる側が、「一般的他者」の態度をとらず、「身構え」たとき、秩序の崩壊が始まるのであり、秩序の崩壊は、見られる側の「まなざし」の変化にあり、いいかえれば、「まなざし」の相互作用におけるヘゲモニーは見られる側、あるいは聴き手の側にあるのです。「身構え」はその一步であり、これを見る側の「まなざし」から、見られる側の「まなざし」へと考察を移動することで、見られる側のヘゲモニー行使の可能性を探る、という問題が新たに生まれてきて、富山さんの「結び目」の切断が生じます。

#### 3. 二つ目の切り口、レヴィナスの「顔」

富山さんは、「社会を作り上げるものはあくまで言葉なのだ。」(78頁)と主張しています。言葉、あるいは「言語秩序」の特徴はそれがロゴスであるということですが、ハイデガーのナチズム加担を批判したレヴィナスは、論理に暴力性、つまりは言葉に暴力性を発見し、これを無化する試みを執拗に続けました。ロゴスの向こうに「顔」があり、「汝殺すなかれ」と呼びかけている、これをレヴィナスは本源的な人間性を意味する倫理と考え、論理に先づ倫理の優位性を、思想として確立することを主張したように私は考えています。

私はこのレヴィナスの回答に不満があり、この問題は、倫理ではなく、存在するものの存在の仕方と、思考の論理とが全然一致してはいない、という当たり前のことがらを、どのように思想化するか、という問題だと考えています。そしてマルクス『資本論』初版本文価値形態論の解説から、商品の価値の実体に対するマルクス自身の思考法則による解明（第1章、第1節）とは別の形で、価値形態論を解き明かしていることに、この思想化の問題の入口を見つけました。端的に両者の相違をあげるとすれば、思考での抽象化は分析的抽象ですが、商品の価値形態は二つの商品が関係し合うこと、いわば総合することでお

互いに抽象し合っているのです。そしてこの関係において、等価形態に立つ側は、この関係のなかでは、自然的素材そのものが、価値という社会的なものの化身とされているのです。これをマルクスは「形態規定」と名づけています。

このように考えると、先ほどのデューイの「一般的他者」の態度ということに関する新しい位置づけが可能となります。つまり「一般的他者」とは法的・倫理的関係の担い手という意味であり、具体的な存在としての人間が、そのままで、社会の中では形態規定されて、法や倫理といった、社会的なものの担い手となっているのです。社会生成と存続の原理はここにあり、これは言葉に先行しているのではないでしょうか。

#### 4. 三つ目の切り口、ランシュエールの「感性的なものの分有」

尋門される側の言葉が「音」としてしか見なされない、これを聞いていて、ランシュエールの「感性的なものの分有」を思い出しました。ランシュエールは古代ギリシャの奴隸が、市民より教養もある人もおり、ちゃんと言葉を話すのに、ギリシャの民主主義においては、奴隸の言葉はたんなる「音」としてしか市民には受け止められなかつた根拠に、奴隸はポリスの市民社会の構成員ではない、という事柄が、市民と奴隸双方に「感性的に分有」されていたことによる、と看破したのです。

これは色々使えると私は考え、この切り口を応用することをいつも試みています。ランシュエールはこのように問題をとらえた後、既成の「感性的なものの分有」に亀裂を入れることを変革のための政治の基準としています。ところで見られる側の「まなざし」のへゲモニー的力の発揮、「一般的他者の態度」の放棄、富山さんのいう「身構え」は、実はランシュエールの「感性的なものの分有」に亀裂を入れること、として理解できます。こう考えると、価値形態論から導かれる、形態規定は、この関係のなかでだけ成立するものであり、市民社会のなかでだけ、人は一般的他者の態度を取得することを要求されるのであり、資本主義のもとで雇用されておれば、大学院卒の高学歴者のマクドのアルバイトは、その発話を「音」としてしか聞かれないと、という現実世界の解説が進みます。とすれば、「音」としてしか受けいれられない側の人々は、一旦その関係から離脱することが必要だということになります。関係から離脱すれば「形態規定」の呪縛から解放され、既成の「感性的なものの分有」の奇妙さに気付くはずであり、そうなると、これに亀裂を入れる政治の構想も可能となるでしょう。

#### 5. 私自身の「結び目」について少々

最後に私自身の「結び目」についてお知らせして、切斷してくれる人が出てきてくれるこことを希望します。

1960 年に左翼がなぜ敗北したか、この問題は、最初は労働者の労働力商品所有者意識の問題として考えていました。やがて資本主義批判の内容の狭さという問題に気付き、搾取や貧困の問題はもちろん批判されるべきだが、「働く人々の資本への経済的隸属」が問題であるという認識に到達しました。そのうち、資本の批判は商品の批判からはじめるべきではないか、という友人の示唆を得て、改めて『資本論』初版本文価値形態論の研究を始め、同時に信用論（これは資本の商品化です）のマルクスの草稿の研究と並行させて、その足跡は拙著『資本論の核心』にまとめました。この見地から、いまの社会運動の発展に役立つような問題提起にまとめようと考えています。

今回提起した富山さんの「結び目」についての切斷は、実は自分自身の「結び目」の、まだ解きほぐせてはいない途上からのものです。昨年 6 月から社会センター研究会を開始し、それまで未知だった若者たちと知り合い、勢いで、スエノモ N にまで来てしまいました。しかしここで皆さんと交流することで、近い将来、私の結び目を切斷してくれる人が現われるような「予感」がしています。

では、最終日の討論が、実りあるものとなることを願って、覚書きを終えます。

## J) 利子生み資本における物象化

榎原 均（ルネサンス研究所関西運委員）

### はじめに

物象化論というと、日本ではルカーチの『歴史と階級意識』（未来社、1962年）がもちだされるが、ルカーチ自身は物象化（Versachlichung）ではなく物化（Verdinglichung）について論じている。訳者の平井俊彦がルカーチの主題である Verdinglichung を、考えすぎて物象化と訳してしまったことによって、ルカーチが物象化論者だという認識が定着してしまったのだ。廣松 涉や佐々木隆治も、ルカーチを物象化論者と捉え、自らの物象化論をルカーチの議論の延長に設定している。そして学会では、物化論と物象化論との相違が曖昧なまま論争がなされ、マルクス自身の物象化論のほんとうの意味は理解されないままであった。（訳語上の問題については拙著『「資本論」の核心』、情況新書、2014年、25～7頁、参照）

私は拙著『価値形態・物象化・物神性』（資本論研究会、1990年、以下本書を拙著と略記する）で物象化論のほんとうの意味を明らかにしたが、この書は自費出版だったこともあり、学界には流通しないままだった。その概要は HP : office—ebara.org/「バラキン雑記」に掲載した「佐々木隆治の物象化論」第2章にまとめてあるので、参照されたい。今回は物象化論のほんとうの意味を、『資本論』の利子生み資本における物象化を論じることで、明らかにしたい。

なお、私事に涉って恐縮であるが、拙著では、資本における物象化を論じてはいるが、当時は、『資本論』第三巻、利子生み資本論のマルクスの草稿が、大谷禎之介によって翻訳途上であり、利子生み資本における物象化については、全面的に取り上げることを禁欲していた。その後、20年以上にわたって、『資本論』研究から離れていたが、リーマンショック以降のマルクス再評価のなかで、研究の再開を企てたときに、大谷禎之介の訳業も終了していてネットで全文をダウンロードできることを知り、『資本論』第三巻、利子生み資本論の研究を再開し、また、拙著『「資本論」の核心』の上梓も可能となった。いまやっと、その時にやり残した、利子生み資本における物象化について論じることが可能となったので、本誌に寄稿しておきたい。

拙著『価値形態・物象化・物神性』はアマゾンでも買えないで、入手希望の方は次の郵便振替口座に二五〇〇円を振り込んで申し込んでください。送料はこちらで負担します。

口座番号 01090—5—67283 口座名 資本論研究会

### 1. 商品・貨幣と物象化

マルクスは、1861～1863年草稿（『剩余価値学説史』）で資本における神秘化と、商品・貨幣におけるそれとの違いについて、次のように指摘している。

「諸物象の主体化、諸主体の物象化、原因と結果との転倒、宗教的な取り違え、資本の純粹な形態 G—G'が無意味に、いっさいの媒介なしに、表示され表現されるかぎりでは、資本の性格および姿態もまた完成されている。同様に、諸関係の骨化も、この諸関係を特定の社会的性格をもつ諸物象に対する人間たちの関係として表示することも、商品の単純な神秘化と貨幣のすぐにより複雑化された神秘化とにおけるのとはまったく違った仕方で作り上げられている。化体は、物神崇拜は、完成されている。」（『マルクス資本論草稿集』7巻、訳文は大谷『経済志林』57巻2号、61頁、S1494頁）

私は大谷の訳業がまだ『資本論』第三巻の第25章だけしか進んでいなかったときに、拙著でこの指摘を導きの糸に（拙著、35頁参照）、利子生み資本における物象化と、商品・貨幣におけるそれとの相違について論じた。この点で限界はあるが、拙著で解明した事柄をまずは紹介しておこう。

まず、マルクスが物象化と物化（物神性・神秘化）の厳密な意味での区別に成功したのは『資本論』初版本文価値形態論と付録であった。そして周知のように、『資本論』第三巻、利子生み資本論は、それ以前に書かれていたノートをエンゲルスが編集して発行されたものだ。利子生み資本論は、『経済学批判要綱』（1857～1858年草稿）、に始まり、そして自ら出版した『経済学批判』に続く主要部分が『剩余価値学説史』としてまとめられた、1861～1863年草稿、そのあとの1863年～1865年草稿、さらには第三巻主要草稿（1864～1865年）、でも触れられているのだが、微妙に分析視角、および叙述が異なっている。エンゲルスはこれらの草稿も参照しつつ1864～1865年草稿から第三巻利子生み資本論をつくったが、物象化と物化の区別という視点からすれば、草稿類は、マルクスがこの区別を定式化した『資本論』初版以前の作品であり、それらにおいてはこの区別は意識的にはなされてはいないのだ。

拙著では、『資本論』初版第一章第1節、商品及び第2節、商品の交換過程、の研究により、マルクスによる物象化と物化の区別を解明し、その区別にもとづいて、マルクスの物象化論についての理解を刷新しようとしたのであるが、その作業は次のように要約できる。

『資本論』に先行する『経済学批判』では、価値形態論は交換過程論に組み込まれ、そして、そこでは商品所有者は商品の定在とみなされている。これに対して、『資本論』初版本文価値形態論では、価値形態論と交換過程論を明確に区別し、価値形態論では商品所有者を登場させず、したがって、そこで貨幣生成の証明は、現行版と違って禁欲され、貨幣生成は、商品所有者を登場させる交換過程論の課題とされている。このような論理展開によって、マルクスは、商品からの貨幣の生成が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によることを明らかにした。

初版本文価値形態論の展開にもとづけば、商品における物象化が、等価形態にある商品の使用価値を価値の化身とする（この事態が形態規定の本来の意味である）、価値形態の秘密から説かれるべき事態であり、他方、物化・神秘化の方は、等価形態の謎性、つまり価値形態において、等価物に与えられる交換可能性という社会的な力が、価値関係の外でも、等価物の使用価値そのものに属する力に見えるという、幻影的形態から説かれるべき事態なのだ。このように、価値形態の秘密と謎の区別と、前者から物象化を導き、後者から神性を根拠づけることで、この物象化と物化の区別が自ずから明らかとなる。

だから、『資本論』初版の商品節、および交換過程節に依拠することで、商品における物象化の仕組みと物化・神秘化との違いとその関連、及び、貨幣における物象化の仕組みと物化・神秘化の違いとその関連が次のように理解できる。商品にあっては物象化が価値関係における等価形態にある商品の使用価値を価値の化身とするという仕組みでなされることで、等価商品の使用価値が幻影的形態をつくりだしているので、人々の認識における物への順応が生まれ、物象による意識支配がみられる。これに対して、貨幣のばあいには、商品所有者たちが商品という物象に、自らの意志を宿すことで貨幣を生成することが物象化の仕組みであり、幻影的形態は等価形態の謎性が、单一の商品金に与えられている点で、より一層発展したものとなる。であるから、双方の物象化の相違点として、貨幣にあっては、物象による意志支配がなされている。つまり商品と貨幣とでは、物象と人格との関係において、意識支配と意志支配の違いがあるのだ。そして神秘化について言えば、商品にあってはまだ単純であるが、貨幣にあってはより複雑なものとなっているのだ。

## 2. 資本と物象化

周知のようにマルクスの『資本論』現行版では、商品章、交換過程章、貨幣章に続いて、貨幣の資本への転化章が続き、ここから資本についての叙述が始まっている。私は拙著で、この『資本論』の章建てにしたがって、資本における物象化を物象化過程とみなして追及してみた。そこで明らかとなつたことは次のような事柄だった。

まず、資本における物象の人格化ということの意味が規定されなければならない。そしてその様式のモデルはまず貨幣によって与えられる。貨幣にあっては「社会的な力が私人

の私的な力になる」のであるから、貨幣蓄蔵の衝動が現われる。商品における物象の人格化にあっては、意識支配はあっても衝動としては発現してはいなかった。しかし貨幣にあっては意志支配がなされることの帰結として、貨幣蓄蔵の衝動が現われ、人格の意志を支配するのである。

こうして資本家は「人格化された——意志と意識を与えられた——資本として機能する」(長谷部訳『資本論』第一巻、河出書房新社、130頁、S160頁)という最初の規定に到達する。しかしこの規定ではまだ資本の衝動が明らかではない。貨幣の資本への転化の章では、労働力という人格的な力が、可変資本という物象的な定在に物象化されることが判明する。しかしこの段階では、労働力の労働市場での売買の考察によるものであるから、労働力の所有者は、買い手の資本家と同じく自由で平等な人格である。ところが資本の生産過程に入っていくと、そこでは絶対的剩余価値の生産及び相対的剩余価値の生産がなされる場であり、資本の衝動が發揮される場となる。

「資本家としては、彼は、人格化された資本に他ならない、彼の魂は資本の魂である。・・・資本の唯一つの生活衝動・・・剩余労働を吸収しようとする衝動」(同書、193頁、S241頁)

この衝動を追って、資本の蓄積過程まで含めて簡略化して見ると次のようになる。まず、労働力の可変資本への転化という、資本における物象化は、人格的なものを物象化する過程としての生産過程を通過して、生産過程で労働者を資本に従属させる。そして、さらにその生産過程が、物象化を生み出す社会的機構そのものを生産し再生産する。この二つの過程の進行によって、資本は労働者の全生活過程を規制し、賃労働者が資本に経済的に隸属していることが明らかにされるのである。

### 3. 三位一体的範式批判での物象化論

マルクスは第48章 三位一体的範式 で自らの物象化論の見地を、商品、貨幣、資本に則して整理している。これは、先に引用しておいた、1861～1863年草稿での提起の具体化としての意義をもつ。拙著では35頁から44頁にわたって詳しく紹介してあるので、ここでは簡単にまとめておこう。マルクスは、商品では、社会的諸生産関係をこれらの物の諸属性に転化し、貨幣では生産関係そのものを一つの物に転化する、と述べた後、資本においてはこの魔法にかけられ転倒された世界がいっそう発展すると述べ、直接生産過程では労働のあらゆる生産諸力が資本に属する力として現象し、流通過程では剩余価値が流通から発生するかのように見えることを指摘している。そのうえで、次のように述べている。

「だがさらに、現実的生産過程は、直接的生産過程と流通過程との統一としては、新たな諸姿容——そこではますます、内的関連の脈絡が消えうせ、生産諸関係がたがいに自立化し、価値諸成分がたがいに自立的形態において骨化しあうところの、新たな諸姿容——を生み出す。」(長谷部訳、『資本論』第三巻、309頁、S 882頁)

このような導入項のあと、剩余価値の利潤への転形にあっては剩余価値の本質自体が隠され、利潤率の均等化による平均利潤の成立と価値の生産価格への転形は、商品の価値と価格との乖離を一般化する。さらに、平均利潤そのものは労働の搾取からではなく、資本に内在するかのように見える。このように述べた後、利子生み資本に該当する叙述に至る。以下に引用しておこう。

「企業者利得と利子への利潤の分裂は、剩余価値の形態の自立化を、剩余価値の実体・本質・に対する剩余価値の形態の骨化を、完成する。利潤の一部分は、他の部分に対立して、資本関係としての資本関係からすっかり分離し、賃労働の搾取という機能からでなく資本家そのものの賃労働から発生するかに見える。これに対立して、次に利子は、労働者の賃労働にも資本家の自己労働にも係わりがないかに見え、それ自身の独立的源泉としての資本から発生するように見える。資本は、本源的には、流通の表面では、資本物神・価値を生みだす価値・として現象したとすれば、資本はいまや、ふたたび、その最も疎外された、最も独自な形態としての利子生み資本の姿態において、みずからを表示する。」(同

書、310 頁、S 883 頁)

ここでは利子生み資本における物神としての現象が、「利子は、労働者の賃労働にも資本家の自己労働にも係わりがないかに見え、それ自身の独立的源泉としての資本から発生するよう見える。」と述べられている。この「見える」という観点が、物象化と物化の厳密な区別のための第一歩であった。そして次のように、物化と物象化との相違が叙述されている。

「資本——利潤、または、いっそうすぐれた資本——利子、土地——地代、労働——労賃、において、すなわち、価値および富一般の諸成分とその源泉との関連としての、この経済学的三位一体において、資本制的生産様式の神秘化が、社会的諸関係の物化が、質料的生産関係とその歴史的・社会的な規定性との直接的癒着が、完成されている。——ムッシュー資本とマダム土地とが、社会的性格として、同時に直接的には単なる物として、それらの怪しいふるまいをするところの、魔法にかけられた、転倒された、逆立ちさせられた、世界。この虚偽の仮象および欺瞞、富のさまざまな社会的諸要素相互のこの自立化および骨化、この、諸物象の人格化と生産諸関係の物象化、日常生活の宗教——こうしたものを、古典派経済学が分解したことは、その偉大な功績である。・・・生産諸関係の物象化・および生産当事者たちにたいする生産諸関係の自立化・の叙述においては、われわれは、世界市場・その状況・市場価格の運動・信用の期間・産業および商業の循環・繁栄と恐慌の交替・による諸連関が、彼らにとって圧倒的な——彼らを無意志的に支配する——自然法則として現象し、彼らにたいし盲目的な必然性として作用するところの、その仕方・様式には立ち入らない。というのは、競争の現実的運動は、われわれの計画の範囲外にあるのであって、われわれはただ、資本制的生産様式の内的構造のみを、いわばその觀念的平均において叙述すべきだからである。」(同書、311~12 頁、S 884~5 頁)

拙著では先の「見える」という観点について「ここで剩余価値の形態の自立化と、それがどのような仮像を人々の意識に生みだすか、ということ」とが区別されていることに注意しておこう。前者は物象化に関連し、後者は物化に関連する。」(拙著、165 頁)と述べておいたが、ここでマルクスは、物化に関しては、「社会的諸関係の物化が、質料的生産諸関係とその歴史的・社会的な規定性との直接的癒着」と述べ、物象化に関しては「諸物象の人格化と生産諸関係の物象化」あるいは、「生産諸関係の物象化・および生産当事者たちによる生産諸関係の自立化」と述べて双方を区別しているのである。

つまり物化は歴史的・社会的な規定性が、質料的生産諸関係と癒着し、例えば銀行券の紙券という質料的素材に、一般的購買力という歴史的・社会的属性を付与されるかに見える事態を指している。他方物象化は、諸物象の人格化、あるいは生産諸関係の物象化、つまりは物象による意志支配を指していることが判明する。そしてこの意志支配は、人格を無意志的に支配する自然法則として現われるのだ。

#### 4. 『資本論』第三巻第 24 章草稿における神秘化論

以上で拙著の紹介は終わり、拙著では展開できなかった利子生み資本における物象化の問題に移ろう。ここでの課題は、三位一体的範式の章の執筆以前に書かれた利子生み資本論では、物化と物象化の区別が明確ではないということを確認し、利子生み資本における物象化とは何かを解明することである。

『資本論』第三巻、第 21 章から始まる利子生み資本論は、第 24 章で、資本関係一般的の外面化を論じ、利子生み資本に則して物象化をとりあげている。しかしこの草稿は、先述したように、『資本論』初版価値形態論での、物象化と物化との厳密な区別つける以前のものであり、この区別が意識的にはなされていない。だから、資本関係の外面化について次のように述べられることになる。

「利子生み資本において、資本関係はその最も外面的で最も物神的な形態に到達する。ここでは、われわれは、G—G、より多くの貨幣を生む貨幣、自己自身を増殖する価値を、これらの極を媒介する過程なしにもつのである。」(大谷、『経済志林』57 卷 2 号、60 頁)

ここでは利子生み資本の場合の資本関係の外面化が指摘され、それが物神的な、つまり神秘的な形態をまとうことが指摘されてはいるが、どのような関係が利子生み資本における物象化であるかは説明されていない。これは次のくだりでも同じである。少し長いが引用しておこう。

「資本および利子では、資本が、利子の、自分自身の増加の、神秘的かつ自己創造的な源泉として現われている。物（貨幣、資本、価値）がいまでは物として資本であり、また資本はたんなる物として現われ、生産過程および流通過程の総結果が、物に内在する属性として現われる。そして、貨幣を貨幣として支出しようとするか、それとも資本として貸ししようとするかは、貨幣の所持者、すなわちいつでも交換できる形態にある商品の所持者しだいである。それゆえ、利子生み資本では、この自動的な物神、自分自身を増殖する価値、貨幣をもたらす貨幣が完成されているのであって、それはこの形態ではもはやその発生の痕跡を少しも帶びてはいないのである。社会的関係が、物の（貨幣の）それ自身にたいする関係として完成されているのである。貨幣の資本への現実の転化に代わって、ここではただ、この転化の無内容な形態だけが現われている。労働能力の場合と同じように、ここでは貨幣の使用価値は、交換価値を創造すること、しかも貨幣自身に含まれる交換価値よりも大きい交換価値を創造することになる。貨幣は可能的にこのような自己を増殖する価値として存在するのであり、そのようなものとして貸し付けられる（これがこの独特な商品にとっての販売の形式なのである）。価値を創造するということ、利子を生むということが貨幣の属性であるのは、梨の実を生産することが梨の木の属性であるのとまったく同じである。そして、このような利子を生む物として、貨幣の貸し手は自分の貨幣を売るのである。そしてさらにそれ以上である。すでに見たように、現実に機能する資本そのものが、機能資本としてではなく、資本それ自体として（貨幣資本〔moneyed capital〕として）利子を生むのだ、というように現われるのである。」（同書、63～4頁）

見られるように、利子生み資本にあっては、社会関係が物として現われ、このことが神秘性をもたらすことが指摘されてはいるが、これはいわば価値形態の謎性、価値関係において等価形態にある商品の使用価値が、この関係の外でも、その使用価値自体が交換可能性という属性をもつように見える、という問題と同等の物化の次元での規定である。価値形態の謎にあたる、物象化の仕組みが、利子生み資本に関しては述べられてはいないのだ。では単なる物化論かというと、もちろんそうではない。マルクスの物象化論は、『資本論』初版の本文及び付録の二つの価値形態論以前には、物象化と物化が一体となって論じられていたのだ。いま、初版の見地から、一体となっている叙述から、利子生み資本における物象化を取りだすことで問題整理をしよう。その手掛かりは次の記述にある。

「次のこともねじ曲げられる。——利子は利潤の、すなわち機能資本が労働者から搾り取る剰余価値の、一部でしかないのに、いまでは反対に、利子が資本の本来の果実、本源的な果実として現われ、利潤はいまでは企業利得という形態に転化して、たんに生産過程および流通過程でつけ加わるだけの附属品、付加物として現われる。ここでは資本の物神的な姿態と資本物神の観念とが完成している。われわれがG-G'でもつのは、資本の無概念的な形態であり、最高の展相〔Potenz〕における、生産諸関係の転倒および物象化である。利子を生む姿態は、資本自身の生産過程に前提されている資本の単純な姿態である。自分自身の価値を増殖するという、貨幣の、商品の能力——最もまばゆい形態での資本神秘化。」（同書、67頁）

ここでマルクスは、利子生み資本における物象化について言及している。資本制的生産に前提される利子を生むという姿態は、生産過程を経過して初めて実現するのだが、ここではその関係が転倒して、この前提だけで利子を生むという形態が成立しているのだ。このように利子生み資本における物象化は、生産過程を消去しているのであり、社会関係の物象化自体が資本関係一般の外面化であり、物化という幻影的形態と切り離しえないのである。

## 5. 利子生み資本と物象化

資本制的生産に前提される利子を生むという姿態が、転倒して、それ自身で利子を生むという形態を生じている。この転倒が利子生み資本による物象化及び神秘化の内容である。この内容の意味を明らかにするためには、エンゲルスが、第24章のタイトルで草稿にあつた「資本関係一般の外面化」を一般を削除して「資本関係の外面化」としたことの是非から始めなければならない。

エンゲルスのタイトルだと、資本関係は、利子生み資本の貸付先である、機能資本家（資本・賃労働関係）を念頭においてしまう。しかし、資本関係一般ということとなると、『資本論』第一巻、第4章、貨幣の資本への転化、の第1節、資本の一般的範式、にまでたち返ることをせまられる。マルクスは資本の一般的範式を  $G-W-G'$  と規定した。これは商品流通の範式  $W-G-W$  と対比し、資本の運動を表現する一般的範式である。そして第4章では、その後に解明される産業資本だけではなく、商業資本や利子生み資本も留保条件を受けたうえで言及している。

利子生み資本の場合は、 $G-G'$  であるが、これについてマルクスは、 $G-W-G'$  の縮約形態とみなし、これも資本の一般的範式に含めているが、しかし、産業資本にたいし、商業資本と利子生み資本は「派生的形態」とみなされ、次のように述べられている。

「商業資本の増殖が商品生産者の単なる詐取によってでなく説明されるためには、長いひとつのつながりの中間の項が必要である・・・高利資本においては、 $G-W-G'$  という形態が無媒介の両極たる  $G-G'$  に、より多くの貨幣と交換される貨幣に、貨幣の本性と矛盾したがってまた商品交換の立場からは説明されえない形態に短縮されている。」（長谷部訳『資本論』第一巻、140頁、S172頁）

周知のように、マルクスはこの資本の一般的範式の矛盾の考察から、労働力という独自の商品をこの矛盾を解決する定在とみなして、産業資本の分析に移っている。他方、『資本論』第三巻では、ここで留保された資本の派生的形態が分析されている。そこでは、平均利潤率の成立と、商業資本の利潤率均等化運動への参入から、商業資本の増殖が解明され、利子生み資本論では、貨幣の売買という流通ではなく、貨幣の貸付が利子を発生させ、この利子が貸借関係を商品交換に擬制していくしくみを解明している。ここでは貨幣は交換手段ではなく、資本として投下されているのだ。もはや商業資本は安く買って高く売る流通過程での詐取によって増殖するのではなく、また利子生み資本も貨幣との交換で貨幣を増殖するという神秘的形態の成立する仕組みが解明されている。そして、この仕組みが資本関係一般の外面化なのだ。そしてこの外面化が必然的に幻影的形態を発生させ、資本の神秘化が完成されるのだ。

## 6. 擬制資本論と資本市場論の解明のために

このような利子生み資本における物象化の理解を現実の分析に活かしていくにはどのような作業が必要だろうか。ひとつは金融市场という曖昧な概念を捨て、貨幣市場と資本市場という区別に立ち返ることが必要だろう。

金融市场という言葉がいつ頃日常語として定着したのだろうか。ヒルファーディングは『金融資本論』を書いているので、その頃には使われていたのだろうが、『資本論』には金融市场という言葉は出てこない。『資本論』では「金融貴族」という言葉は出てくるがこれは当時の日常用語だったと想像される。『要綱』で金融市场と訳されている個所があるが、この原語は貨幣市場である。

マルクスは貨幣市場で貸借されている貨幣資本（マニド・キャピタル）を、資本の商品化と捉えた。では貨幣市場と資本市場とはどう違うのか。貨幣市場は貨幣が貸借される場である。マルクスは貨幣の貸借を、貨幣資本家と機能資本家の間での貨幣の取引と想定し、その場合には貨幣が剩余価値を産むという属性をもった資本として、手放されていることを明らかにした。貸借は利子を産み、利子が価格とみなされて商品交換に擬制され、資本としての貨幣の「売買」が行われているが、これが利子生み資本の観念を構成する。

利子生み資本が成立すると、物象化の仕組みによって、資本にはそれ自身に利子が付く

ということ自体が現象として成立する。そしてこの現象世界では、現実に産業資本として利潤を生産してはいない国債や株式も、利子や配当といった定期的収入が利子に擬制され、それを資本還元して、資本とみなされるようになる。これは擬制資本（架空資本）である。資本市場とはこの擬制資本が売買される市場である。資本市場での金融商品は、利子生み資本の投下対象であり、金融商品の運動は、貸借関係である利子生み資本の運動とは異なり、差益の獲得をめざした投資行動であり、投機行動である。

投機は金融商品の売買による差益の獲得であり、金融商品は架空資本の定在形態であるが、しかしこの架空資本も貨幣に換金すると、現実的な貨幣資本としての属性をもつ。しかし、それは産業資本や商業資本に貸し付けられないかぎり、利子生み資本としては機能しない。しかし、投機行為は、貨幣の「それ自身利子を生む」という現象形態から生じた資本市場での差益獲得という形で利殖を実現し、こうして、資本市場での金融商品は利子生み資本の投下対象として成立するのである。このような投機が資本蓄積をもたらすためには、発達した資本市場が必要である。ウォール街はそのような市場として、アメリカ資本主義の発展に寄与した。誤解を恐れずに言えば、アメリカ型資本主義はウォール街なしには発展できず、それは資本市場が創り出した資本主義だったのだ。

資本市場はそこに富が流入するかぎり、金融商品の価格を上昇させる。富が他の市場に流れれば、バブルは崩壊していく。アメリカ資本主義は70年代以降、資本市場が株式会社から配当を吸い上げる仕組みを形成してきた。60年代に形成された、巨大株式会社の終身雇用制、高賃金、高度な福利厚生、また地域への貢献、等々は社外取締役のお目付けで、コストカットされ、敵対的買収の危機にさらされ、多国籍企業といえども不安定な存在になっている。つまり資本市場が社会を支配する時代が到来しているのだ。このような現代の信用制度の分析に向かうには、貨幣市場と資本市場の区別、及び利子生み資本と擬制資本との区別が不可欠である。引き続き、擬制資本における物象化の仕組みを解明していく作業を継続していきたい。